

オウステン ナフシスイ、オウステン ナフシスイ

「サリナさん、このひとたちはこの歌をうたって自分自身を鼓舞し、やり場のないうらみを込めて昇華したのでしょうか、こんな歌をうたったら、監視員たちにも聞かれてバレてさぞや怒られたのではないのでしょうか。」

オウステン ナフシスイ、だんだだだん だんだだん

体さえ動かすのなら、きっと言葉がなんであろうと、何語を話そうと、聞き取れなくても、

体さえ動かすのなら、おそらく罰せられはしなかった、何語だろうと、聞き取れないから。

オウスタンムン テエギカツトウク、チエプサ カツトユメン ウトウメイドウ

歌に残った言葉こそ、現代<sup>いま</sup>まで流れる血脈の涸れ沢が如く読み<sup>よ</sup>がえり

ザーラム トンチイン ベグレエツ、ビシムドゥン キャツトウメイドウ

かえりたまえ、今日こそ國へ

オウステン ナフシスイ、その川は、教科書に載るような有名な歌ですが、わたしたちの血肉に流れる水は、命が助けた水ですが、いまは涸れ沢だとしても、掘り返せばその石やその水が何でできているのかがわかってしまうのを恐れて、その川は再び灼熱の地の底へ、焼かれて、埋められて、戻されて、消されて、しまったのです。しかし現代も、グルジャの大地は見渡せばあたり豊かに枝分かれた川に潤されているのであって、だから、いま、わたしたちは歌をうたって、その川からすくいなおすんです、そうですね。

んーアーんーアー

だんだだだん、だんだだん

だんだだだん、だんだだん

その川は天山山脈からカザフスタン東部のバルハシ湖に注ぎ込む。